



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

イエスのもとに来る→信じる→肉を食べ血を飲む(2)

聖母の被昇天、この日は終戦記念日、そしてカトリック平和旬間の最後にあたります。一人ひとり、世界平和・社会の平和・家庭の平和のために祈りましょう。今日お祝いしている聖母マリアは神によって天に上げられた最初の人物と言えます。私たちはマリアに与えられた榮譽に目を留め、母マリアを鏡として生きることにはしましょう。

先週から、三週連続で共通のテーマを取り上げることにしていました。「イエスのもとに来る」「イエスを信じる」「イエスの肉を食べ血を飲む」という一連の流れです。先週は「イエスのもとに来る」ということに注目しました。今週は「イエスを信じる」ということを中心に考えてみたいと思います。

聖母マリアは、生涯をイエスへの信頼の中で過ごされた方です。先週は「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。」(ヨハネ 6・44) このいえすのみことばを強調しましたが、マリアは常にイエスを信頼していましたので、いつもイエスのもとに来るお方でもありました。私たちは御父に引き寄せられてイエスのもとに来るのですが、マリアはいつもイエスのそばにいる、そういう方でした。

聖書の箇所を読む限り、マリアのイエスへの信頼は一瞬も揺らぐことはありませんでした。イエスのもとを片時も離れたことがないので、イエスを信じる心も決して変わることはありませんでした。神殿礼拝の際にイエスを見失い、三日後に見いだした時にも、母マリアのイエスを信じる心は変わることなく、出来事の意味が示されるまで、心の中で思い巡らしたのでした。

もっと言えば、母マリアは十字架上でのイエスの出来事を最後まで見届けましたから、十字架による救いに最初にあずかった人の一人だったのです。私たちはミサの形で、十字架によるイエスの救いの働きに預かりますが、母マリアはそれよりも早く、救いの恵みにあずかったのではないのでしょうか。

すると、「イエスのもとに来る」「イエスを信じる」「イエスの肉を食べ血を飲む」この三つの出来事は聖母マリアの生涯の中で実現していた、と言えるでしょう。聖母マリアは幼子イエスを神殿に奉獻する時から、「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」(ルカ 2・35)と預言を受けていました。ですからマリアの中では、私たちが取り扱う三つは同時に存在し、三つを生涯を通して実現していたのです。

私たちは聖母マリアのように三つが同時に存在することはできません。それでもマリアを模範とし、イエスのもとに来るたびにイエスへの信仰を呼び起こし、感謝してイエスの御体と御血に近づきます。イエスを遠くから信じるという道は存在しません。日々、イエス・キリストをより近くに感じる生活を心がけましょう。マリアを模範とする生き方が、イエスに近くいてイエスを信じるための最も近道となるはずで